

目的 着衣を外部から評価する場合、主に視認によって行われる。視認にあたって衣服の形態、布の特性を独立にあるいは、ある程度の相関を利用して評価し、ついで総合して全体の評価を行うものと推定される。本研究では、女子大生におけるそのような視認による評価がどのような構造を持つか検討を試みた。

方法 市販の布地20種を用い、同一の裁断パターンを使って20着のフレアスカートを構成し、人台に着装させて1着毎にカラー写真を撮影した。20枚のカラー写真を女子大生に呈示し、布地の色、柄の影響を極力排除し、スカート形態および布特性の分類を要請した。パネラーは2群に分かれ、第1群は非被服学科の2年生、第2群は被服学科の4年生である。アンケートの結果は、多変量解析の各種手法を用いて分析した。

結果 アンケート結果をクロス集計し、平均化した分類パターンを誘導したところ、ほぼ4グループに分類し得ることが分かった。アンケートに際して、形態印象に関する5個の因子および布特性に関する6個因子を挙げ、それぞれを5段階評価して評点を与えるよう併せて要請したが、各因子毎の平均評点の組を使ってスカート試料間の差をユークリッド距離化し、これを使って試料全体をクライスラー分析して4つのクラスターにまとめた。クラスター化にはいくつかの方法があるが、郡平均法を用いた場合が第2群による形態分類に最も類似するところを見出し、さらに、人による分類の1/3程度は、形態の幾何学的情報に、残り1/3は布特性情報に基づく判断であり、最後の1/3は色、柄などに重点を置いたものとの推論を得た。